

# 宮沢賢治「氷河鼠の毛皮」の脱成長アニミズム

松 崎 慎 也

Animism and Degrowth in MIYAZAWA Kenji's "The Fur of the Glacial Mouse"

MATSUZAKI Shinya

## はじめに

2021年の盛夏、「100年に一度の」と形容される、新型コロナウイルスによるパンデミック下、緊急事態宣言が発令される東京で、世論の多くが反対する中、オリンピックは開催された。世界最大のスポーツの祭典は、医療提供体制が逼迫し、外出自粛が叫ばれる非常事態の只中で強行されたことにより、そのオーラは薄れ、平時であれば隠れていたかもしれない、利権絡みの商業主義的イベントとしての醜悪さを至るところで露呈した。

7月24日、TBSの「報道特集」がスクープ、放映した、開会式当日の国立競技場で4,000食という大量の弁当が廃棄されていた問題により、組織委員会が謳う、持続可能性に配慮した準備・運営が、名ばかりに過ぎなかったことが、大会開始早々に明らかになる。一月後の8月27日、組織委員会は会見で、大会期間中およそ13万食（発注量の約25%にあたる）の弁当が廃棄されたと認めた（「弁当13万食」）。

食べることが意味する殺生とその重みへの意識が、仏教を通じて浸透し、食べ物を無駄にすることへの痛みの感性が組み込まれているこの国の人々は、いくつもの弁当がゴミ箱に投げ込まれる映像から、五輪という、グローバル資本が駆動させる巨大ビジネスのおぞましい姿を覗き見ることとなった。

五輪の外でも、大量の食品廃棄はグローバルに常態化している。この国の一年間では、まだ食べられる食品が約612万トン廃棄され、これは世界全体の廃棄量13億トンの0.47%、東京ドーム約5杯分にあたる（「食品ロスの現状」）。一国のこの廃棄量だけで、世界の飢餓地域向け年間食料援助量の1.4倍分である（「食品ロスについて」）。食品（あるいは命）の過剰な生産・販売・購入・廃棄も含め、グローバル消費社会全体で享受するサービスの過剰化は、地球環境へ多大な負荷をかけ続けている。

地球環境破壊に邁進し続ける「消費社会は経済成長社会の当然の帰結」であるという、フランスの経済思想家で、脱成長論を先導してきたセルジュ・ラトゥーシュの指摘を待つまでもない（『脱成長』32）。われわれはそのことにずっと気づきながら生きてきている。それでも大多数が、自分の首を絞めているこの非常識な経済成長を止められないものと信じ、固執し続ける。この近代の経済成長信仰に変革をもたらし、増大し続けようとする資本の、際限のない運動にストップをかけることを目指すのが脱成長論である。

ラトゥーシュは、政治経済学者ディディエ・アルパジェスとの共著の中で、脱成長社会が「可能になるためには、私たち自身が、自分のもつ習慣や信念やものの考え方から決別することがどうしても必要」と説く（21）。脱成長論は、危機を回避する、成長路線とは異なる道へ進むための、社会制度とコミュニティの設計、テクノロジーの使用法や企業経営の倫理などに関するヴィ

ジョンを構想し、その実現に向けた広い意味での〈政治的〉活動に取り組もうとしている。「持続可能な」「発展／開発」という、相容れないものを結合させて現実への視界を曇らせる、まやかしのシニフィアンや、標語化したSDGsの文字列に対抗するために、世界の再生を導く新たな表現の創造をこの運動は必要としている。

ラトウーシュは、脱成長社会の実現のためには、「世界の『再魔術化』」が必要だと言う（『脱成長』141）。新種の宗教を興そうというのではない。「スピリチュアリティ」を活性化させる「世俗的な」実践としての芸術・アートの力が求められているのだ（ラトウーシュ『脱成長』141）。脱成長は「世界と調和してよく生きるための<sup>アート</sup>技法」であらねばならないと説くラトウーシュにとって、「世界と調和してよく生きる」ことと「芸術と共に生きる」ことは同格なのだ（『脱成長』142）。

脱成長と芸術とを結ぶ、ここでの鍵概念がアニミズムだ。ラトウーシュが引くのは、カナダの社会学者ジャック・ゴドブー（Jacques T. Godbout）の次の言葉である。

L'artiste témoigne peut-être du fait que l'**animisme** est la seule philosophie qui respecte les choses et l'environnement, une philosophie adaptée à l'esprit du don qui circule dans les choses, et dont la modernité nous a coupés. . . . L'artiste rappelle à l'individu moderne que, quoi qu'il fasse, il est condamné à une forme quelconque d'**animisme** s'il veut que les choses aient un sens. （芸術家はおそらく、アニミズムが、ものと環境を敬う唯一の思想、ものの中に循環する贈与の精神に適った思想、近代によってわれわれから切り離されてしまった思想であるということを示す。……何を創造するにしろ、ものに意味を宿らせたいと望むのであれば、何らかのアニミズムの形を取らざるを得ないことを、芸術家は現代人に思い出させる；筆者強調および翻訳）

消費主義によって遍く商品化され、略奪される一方である世界の尊厳を重んじ、世界を独占しないための思想としてアニミズムが、その実践である芸術的創造とともに招喚されているのだ。

上でややロマンチズム漂う形容がなされているアニミズムであるが、より具体的にはどのような概念であるから、世界との調和をもたらす可能性があるのだろうか。ゴドブーは上の引用の直前に、「à croire que les choses ont une âme」（物が靈魂を持つと信じる；筆者翻訳）という短い語句を置くのみで、アニミズムについて具体的には語らない。アニミズムとは、環境破壊の抑制や贈与の精神といった、エコロジカルな原理を内包する思想なのか。脱成長の基盤的倫理と何か結びつくものはあるのか。現在、人類学の領域で活発に交わされている、アニミズムについての議論を参考にしながら、その答えを探ってみるのが本論の一つ目の目的である。

脱成長アニミズムの芸術は、今日の芸術家が生み出す作品に限られてはいない。ラトウーシュは著書『脱成長』の終章末尾に、脱成長の先駆者として、自然との調和を思考、実践したヘンリー・デイヴィッド・ソロー（1817-1862）の名を挙げる（142）。脱成長の思想運動は、新たな表現の創造とともに、過去の表現に対する新たな読解・批評の試みも含んでいるということだ。温故知新、あるいは、開かれたテキストの分析は文学批評が挑戦してきたことでもある。本論では、昨今、エコロジカルな再読が盛んな宮沢賢治を取り上げ、その童話「氷河鼠の毛皮」（初出は1923年）を、先に検討するアニミズム論を踏まえ、脱成長アニミズム文学として読んでみたい。この童話における、人間による、非人間の過剰な殺生、過剰な消費に対する節度の喚起に目を向ける。これが本論のもう一つの目的である。この作業を〈アニミズム文学批評〉と呼ぶことができるとしたら、この批評は、ある種のアクション・リサーチとして、脱成長の思想運動に参画しながら、再生の実践に取り組む。

## アニミズムの広がり、アニミズムのためらい

今日まで普及するアニミズムという概念の創始者エドワード・バーネット・タイラーは、『原始文化』（初版は1871年刊）において、「宗教の最小限の定義は、諸々の霊的存在への信念である」とし、この定義を「低級種族の宗教」を研究する際の原点に据えた（518）。そして、「霊的存在に対する一般的信念」に〈アニミズム〉という用語を当てた（タイラー 520）。タイラーは、霊的存在には、「生き物の魂」と「それ以外の霊」という二種があると見た（521）。そして、「野蛮人」は、動物の魂、植物の魂という観念を持ち、「私たちにとっては魂も生氣もないたんなる物」にも魂があると考えているとした（『原始文化』570）。

タイラーのこのアニミズム論は今日では、野蛮から文明へという、その宗教進化論の部分が、ヨーロッパ中心主義とされ、批判を受ける。そしてこの後で見るように、近年、アニミズム論は、タイラー的靈魂論から、人間と非人間との関係論へと移行した。それでも、現代の人類学者が先住民族の中に見るアニミズムには〈諸々の霊的存在への信念〉も含まれているので、タイラーの最小定義は現在も生きていくことになる。

アニミズムに関する現代の代表的論者たちを寄稿者に迎えて編まれた、2013年刊行の論集の序論で、宗教学者グレーム・ハーヴィー（Graham Harvey）は、アニミズムという用語が多義化するに至った目下の多様性を有意義なものとして捉えている（1）。アニミズム論を多様性へと開いた動きは、ニュー・アニミズムと呼ばれる。アニミズム論は、タイラー的靈魂論、“within”のアニミズムから、ニュー・アニミズム的“in between”の議論へと移っている（Harvey 3）。

その新たな潮流の嚆矢となったのが、人類学者A・アーヴィング・ハロウエル（A. Irving Hallowell）による、カナダの先住民族オジブワの調査から生まれた1960年の民族誌である。ハロウエルは、オジブワが、石や雷のような無生物を文法的に生き物の範疇に入れて言語化し、ときに〈人〉の属性を持つものとして言及することを報告する（23）。「われわれの周りの石はみな生きているのか」と、ハロウエルがオジブワの老人に尋ねると、そのすべてではないが、いくつかは生きているという答えが返ってきた（24）。ここから、ハロウエルは、オジブワは石のような無生物にも魂があると考えるタイプのアニミストではないと見る。特定の状況下で、ものに関わる経験をオジブワがする中で——石が動くのを見るとか、石の声を聞き、話しかけてみるとか——“the stone was treated as if it were a ‘person’”（石は「人」であるかのように扱われた；筆者翻訳）と説明する（24-26）。

ハロウエルの帰結は、それでも依然、非人間を人間〈であるかのように〉見なす特殊な〈文化〉を設定している点で、西洋中心主義から抜け出せていないと批判を受ける。特殊文化のラベルを貼りつける視点が、オジブワの人格的〈石〉を字義通りではなく、比喩として記述してしまうのである。

次に、西洋近代に対する批判としても展開する、現代のニュー・アニミズム論を見ていくが、多様性を持つと言われる理論のすべてを追うことはできないので、代表的な人類学者二名の論を取り上げ、関係論としての共通項を取り出しながら、そこに環境倫理のようなものが見出せるのか検討していく。

自然に対する見方が異なる文化があるとする、ハロウエルが抜け出せなかった、自然と文化の二項対立、そして自然を人間から切り離して対象物とする宇宙観という、西洋近代に特有なこれらの思考の見直しをせまるフィリップ・デスコラは、人間が他者を同定するときの原理として、四つに大別した存在論（存在者に特徴的な思考・行動様式の意味でデスコラは使用）を提示した。

何らかの他者（人間であれ非人間であれ）に直面したときに、私が想定しうるのは、次のいずれかの組み合わせである。この他者が、自分と同一の肉体的・内面的要素を持っている場合。この他者の内面性と肉体的性が、自分のものと異なっている場合。内面性は似ているが、肉体的性は異質である場合。内面性は違っているが、肉体的性は類似している場合。最初の組み合わせを「トーテミズム」、二番目の組み合わせを「アナロジズム」、三番目の組み合わせを「アニミズム」、最後の組み合わせを「ナチュラリズム」と呼ぶことにしよう……。 （デスコラ 177）

ここでの内面性とは「精神・霊魂・意識」などで、肉体的性とは「外面的形態、実質、生理学的過程、知覚的過程、感覚運動的過程」などである（デスコラ 170）。

この区分によりデスコラは、アニミズムとは、内面性に類似を、肉体的性に差異を意識し、「人間が、非人間に自分と同一の内面性を繰り入れ……肉体的性によって人間からはっきりと区別」する思考・行動様式であるとする（デスコラ 185）。この図式は、「同じ『文化』を共有する人間と非人間の内的連続性」がアニミズムにおいて普遍的であることを示している（デスコラ 321）。

アニミズムと対比的な存在様式であるナチュラリズムは、同定する対象の他者と、自己は、内面性で異なっていると意識する一方、肉体的性は類似していると捉える。これは、精神と物質（身体・自然）を分けるデカルト的二元論の支配する、西洋近代の存在論を指す。「近代ナチュラリズムは、時間的・空間的に隔たった諸文化について判断を下すための基準となるどころか、世界や他者を対象化する作用を支配しているもっと一般的な図式に関する可能的表現の一つでしかありえない」と、デスコラは、西洋近代的思考・行動様式の特殊性に念を押す（19）。

人類学者レーン・ウィラースレフは、シベリアの先住狩猟民ユカギールのもとで自らも狩猟者として活動し、ユカギールの世界では、「人格は様々な形態を取ることができ、人間はそのうちのひとつに過ぎない。人格は、河川、樹木、霊魂、精霊の形で現われることもある」ことを経験する（12）。そこでの調査について記した民族誌の中で、特定の状況下での他者との関わりから生じる、ハロウエルがオジブワに見たのと同じ類のアニミズムについて語っている。

ユカギール人のアニミズムは、はっきりと言葉にされた、ドグマ的な世界認識の体系ではないし、あらゆる自然物と自然現象がいかなるときでも人格性を与えられていると言っているわけでもない。……動物やモノの人格性は、狩猟の最中のような、綿密で実践的な没入が生じる特定の状況下において立ち現れるものだ。（ウィラースレフ 22-23）

ウィラースレフはこの実践的アニミズムをミメシス（模倣）だとする（23）。

ウィラースレフのアニミズム論は、人類学者マイケル・タウシグが『模倣と他者性』（原書 *Mimesis and Alterity* は1993年刊）で展開したミメシス論に依拠している。ユカギール人の狩猟者がエルク（ヘラジカ）を狩るときにエルク革の外套に身を包み、エルクの身体運動をまねる。そのように「ユカギール人の世界は、概して『模倣化された』世界である。あらゆるものは、限りないほど数多くある模倣者と対になる。そしてその模倣者は、あらゆる方向に拡張していきながら、絶えず互いを映し合い、こだましていく」（27）。ユカギール人の世界では、エルクもエルクの土地にいれば、人間の姿をして人間と似た生活を営んでいる。

内面性と肉体的性という二つの平面の下での、内面性への類似の意識と肉体的性への差異の意識という、二重の意識は、ウィラースレフの実践指向型理論とデスコラの普遍指向型理論の双方に通底するものだ。

ミメーシスは、模倣する者を他の身体、モノ、人々からなる世界と接触させるが、再帰的に彼を彼自身へと向けることを強いることで彼をそれから分け隔てる。実際のところこれが、ユカギールが力の源泉としてミメーシスにそのような途方もない重要性を与える所以である。なぜなら、まねる者は、重要で強力な他者との関係に入り込み、姿を変えることができるが、その過程で必ずしも自分自身を失いはしないからである。(ウィラースレフ 51)

アニミズムは、主客合一、自他融合のような雑な観念で扱っては、理解を誤る現象なのだ。

ウィラースレフはアニミズムを理解しようとする中で、デスコラと同じように、デカルト的二元論を批判する。精神と世界との間に乗り越えられない壁を築く二分法は、「自らの精神のうちに世界を表象することによってのみ、世界を我が物にすることができるという考え方で」、「人間の知覚の性質に関して、ほぼまったくと言っていいほどねじ曲げられた説明」であると、ウィラースレフは述べる(30)。アニミズムを理解しようすると見えてくるのは、「知覚は人々が世界との間で今も続けている関わりの実践的文脈の中に根強く位置づけられている」ということ(ウィラースレフ 30)。精神の中で世界に記号を付与することで、世界が理解できるのではない。世界への理解は、世界と関わる実践の場から生まれる。

そして、〈アニミズムを真剣に受け取る〉ことをウィラースレフは提案する。われわれはアニミズム存在論の中で、人格的〈石〉を比喩、擬人法、擬人観といったシンボル操作として扱うのではなく、字義通りに受け取る必要があるのだ。

非人間が、外見は異なっても、人間と同じ「文化」、同じ精神、同じ霊的性質を持つ人格であると考えたアニミズムには、それではどの点で、環境破壊への抑制が内在されていると言えるのか。

ウィラースレフは、ユカギールの中で主食としてのエルクの重要性が高まり、過去十年間でその個体数が30%以上も激減したことを報告している(57-58)。ソビエト時代は、ユカギールはコルホーズに組織化され、輸入家畜肉を貨幣で買っていたのだ(ウィラースレフ 57-58)。北方狩猟民の多くに、消費可能限度を越えて、ときには生態学的危機を招くほどの大量屠殺を行う傾向があるのは、殺せばその動物の支配霊の所有する群れが増え、未来の獲物も増えると信じているからである(ウィラースレフ 65)。このことから、アニミズムに、洗練されたエコロジカルな思想を見つけようとしても無理だということがわかる。

ただ、ウィラースレフによると、ユカギールには、殺すことを抑制しようとする考えも働くという。獲物を殺すことは、支配霊から人間の命を正当な見返りとして要求されるリスクを負うことにもなるからだ(ウィラースレフ 82-83)。そのため動物を殺すのを最小限に抑えようとバランスを取るといふ(ウィラースレフ 87-88)。

デスコラは、アニミズムにおいて非人間は人間と同じ条件を分け持っていることから、アニミズムを「社会性の分与においては際限なきリベラリズム」と表現し、これを「人間起源的」と呼んでいる(355)。アニミズムでは、非人間も人間と同じく、狩りをし、食事をし、結婚をし、同じ社会生活を営み、「霊魂を有するあらゆる存在物が主体の尊厳を手にする」(デスコラ 388)。それは、あるイヌイットのシャーマンがその不安を「生存に関する最大の脅威は、人間が食べるものが全面的に霊魂でできているということだ」と告げるように、動植物を食うことを難しくもするのだ(デスコラ 388)。

食わぬわけにはいかない。そこでどうするか。「非人間的人格を食べることによるリスクを計算し、それを受け入れる」という方法が広く見られるのだという(デスコラ 389)。動物の主に、死んだ人間の霊魂を返還する方法などだ。そして「人間は、自分が食う非人間的の身体と交換に、いつ

も『人格で支払う〔労苦を厭わない〕必要がある』（デスコラ 392）。「人間であり、かつ狩られる獲物である。捕食者であり、かつ獲物である」という状態だ（ウィラースレフ 50）。よってアニミストには、「存在論的境界が多孔的であるという明らかな事実を繰り返し目の当たりにした際の無言のゆらぎ、……アニミズムに固有な……不安」が常に存在することになる（デスコラ 390）。

人間起源主義からくる、人格存在に対する平等主義的分与。これが、アニミズムの中に、世界との調和の原理として見出せるものだろう。近代西洋ナチュラリズムの側から起こったエコロジカル思想とは別物で、ラトウーシュたちが求めていたはずのものを見た目の印象は異なっている。しかし、存在同士の壁が孔だらけであることから来る不安を抱え、ナチュラリズムに内在する、非人間のモノ化とは無縁な思考・行動様式が存在するという、その報告がここにある。

人類学者たちは先住民から教わったことを民族誌に描く。人類学者によるその報告をわれわれが〈真剣に読む〉。そのことにより、われわれの中の習慣や常識や信仰が覆り、世界からの略奪が度を越していることへのためらいが蘇る可能性はあるのだ。

### アニミズム文学、「氷河鼠の毛皮」の脱成長アニミズム

アニミズム文学とはどのようなものか。前節での検討から、アニミズム文学とは〈非人間を人間と同じ人格であると考えた文学〉と定義しておく。対象となる文学テキストの作り手は、アニミストでなければならないというわけではない。テキストの意味は作者の属性で決まるわけではないからだ。

一つのアニミズム文学テキストの物語の進展を空間的に捉えた場合、全面的にアニミズム性が広がっているテキストもあれば、アニミズム性が空白である部分を内包するテキストも存在するだろう。登場するアニミストたちに、非アニミストが紛れているということもあろう。また、例えば、人間の言葉で会話をする動物が登場する場合もあれば、人間と会話はできないが、喜び踊ることはできる花が登場している場合もあるだろう。そのとき、前者は、内面性において類似度が高いテキスト、後者を内面性において類似度が低いテキストと呼ぶことができる（類似度は、テキストについてのなんらかの優劣評価を表すものではない）。宮沢賢治の童話のあるものは、ここで見る例もそれにあたるが、動物と人間とが会話をするので、高類似テキストに属する。

寓話というジャンルは、登場する非人間に人格が付与されているのは、人間社会で意味を持つ教訓を、物語を通して伝達する際の便宜に過ぎないので、アニミズム文学とは言い難い。よって例えば、同じ賢治作品でも、寓話性の強い「猫の事務所」はアニミズム文学には入らない。

ウィラースレフが紹介する、ユカギール人に起きた出来事の話の中には、宮沢賢治の童話の中の出来事かと思わせるような話がある。アニミズムの観点から見なければ、なんとも不可解なものだ。

戦時中のことさ。……長いこと……トナカイの群れを追っていたんだと思う。……見上げると、二十メートルほど先に一人の年寄りがいたんだ。……誰だと尋ねても、答えなかった。その代わり、ついてくるように手招きした。……私はついて行った。……私は、彼の足跡がトナカイのものなのに気がついた。丘の背後には、三十かそれ以上のテントからなる大きなキャンプがあった。……あらゆる世代の人たちがいて、子供たちは遊び、老人たちは座ってタバコを吸い、女たちは料理をしていた。……彼は、トナカイが音を立てるように妻に話しかけ、彼女も音を立てて返したんだ。……女は私に食べ物をくれたが、肉ではなくコケだった。

（ウィラースレフ 154-55）

これはユカギール人の、人格的トナカイとの一つの経験の例である。アニミズム文学は上のような経験に似た、人格的非人間との経験を描く創作テキストである。

2021年の初秋、アメリカ軍がアフガニスタンから撤退した。ちょうど20年前に起きた2001年9月11日のアメリカ同時多発テロを受けて始められた、アメリカ史上最長と言われる戦争。その終結が宣言されたのだ。そして、米軍侵攻前のアフガニスタンを支配し、侵攻後に政権が崩壊したタリバンは、撤退する米軍と入れ替わるように再び全土を掌握した。

2001年のテロの直後、宗教学者の中沢新一は、『熊から王へ』と『緑の資本論』の二冊において、宮沢賢治の「氷河鼠の毛皮」を、「神話的思考」に基づき「圧倒的な非対称」を描いた、格差とテロの物語として読み解いた（『熊』17；『緑』16）。<sup>1</sup> そのアレゴリーとしての読みに共感しつつ、ここでは、前節で検討したニュー・アニミズムの視点から、字義通りのアニミズムとして、この童話を読んでみたい。<sup>2</sup>

物語は、極寒の北方から断続的に飛ばされてきた報告書の伝聞。紙切れの飛んでくる先にいる記者は謎。イーハトヴ民へと報告が伝わる結果となった、記者の手柄（紙を飛ばしてしまったことは本人にとって不本意だったろうが）と届いたことの幸運。ベーリングを目指して、「眼にあつた」人たちについてのおおはなし（宮沢 147）。事は「どなたも知りたい」はずのスキャンダルなのだという示唆が、この物語の冒頭にはある（宮沢 147）。

12月26日午後8時発ベーリング行き最大急行。ある車両の旅客は次のような面々だった。「イーハトヴのタイチ」と名乗る顔の赤い肥った紳士。それと似たようなりの紳士たち。北極狐のような顔の、痩せた赤ひげの男。若い船乗りらしき男。痩せて陰気な顔の者と商人風の者などの三、四人。全体（男ばかりのようだ）で15人ほどとあるので、車両は紳士らが五分の三を占める。

この「氷河鼠の毛皮」を4月15日付『岩手毎日新聞』に発表した同じ年の7月、宮沢賢治は花巻駅から列車に乗り、遠く北を目指し、8月にサハリン（樺太）の地を初めて踏む。賢治がサハリンを訪れた理由は、稗貫農学校の教え子の就職を斡旋してもらおうと、大泊の王子製紙で働いていた旧友の細越健に会うためだった（藤原 10）。同年5月、従来の小樽-大泊航路に代わる稚内-大泊間の連絡航路の就航により洋上時間が大幅短縮され、上野発の急行列車で樺太まで57時間ほどで直行が可能となった（藤原 12-13）。

イーハトヴのタイチは、小樽までのルートで花巻駅から、樺太行き急行に乗り込む地元の名士と行ったところだろうか。他の紳士はどんな人たちだろう。当時のサハリンの日本植民地は、紙の王国と称されるほどパルプ・製紙業が盛んだった。紙の王国は三井王国でもあり、三井財閥が傘下の王子製紙を進出させ、森林開発（三井物産）、石炭生産（三井鉱山）にも関与して、産業の一体化を図っていた（三木 84）。他の紳士たちは、そんな会社の経営幹部といった感じか（報告の紙切れは王子製紙製だった？）。<sup>3</sup>

紳士らとその他の旅客との間には、服装の違い、すなわち、体感している寒さの度合いに隔たりがある。紳士たちが毛皮の外套を着込む一方で、船乗りの青年などは黄色い帆布の上着のみだ。12月の吹雪の中を走る、スチームがまだ十分回っていない列車内の寒さを、商人は「さつぱり何でもないといふやうに」眠りで紛らすしかないようだ（宮沢 149）。

タイチと役人らしい紳士との間の会話も、防寒の話題から始まる。北極近くの「絶対」的寒さに対処するには、どのくらいの防寒装備が適当なのか（宮沢 151）。初めての北方冒険らしきタイチは、自分の外套を自慢したくて、その話題を選んでみている。ラッコにビーバー、黒狐などの毛皮を着込んだタイチの装備は十分すぎるものであり、かつ、上着の一枚などは450疋分の氷河鼠の頸のところの皮のみでできているといった贅沢すぎるものであった。

化石燃料の大量消費で身の安全を確保しながらでなければ辿り着くことなどできない極寒の遠方

へわざわざ向かう、タイチの目的はすぐに明かされる。毛皮目当てに黒狐を900匹、たった一人で獲ってくるという賭けをしているのだ。この道楽が「下らない」ものであることを、この富豪の紳士は間もなくして自分でも気づき始める（宮沢 154）。生活目的の狩猟ではなく、単なるゲームであり、不要不急のイベントであり、しかも車内は「イーハトヴのタイチ」という名が通用しない、見知らぬ者たちばかり。賭けの条件などなければ、従者を従え、自分の持ち船でやって来て、「殿さま」のままでいられたのだから（宮沢 154）。

もう一人、痩せた赤ひげの男の目的も直にわかる。男は「しきりに鉛筆を舐めながらきよときよとと聴き耳をたてて何か書きつけてゐる」（宮沢 154）。男は人格的北極狐で、この列車の襲撃を計画する熊たち側のスパイであり、略奪者は誰なのか車内で密かに調査をしているのだ。

帆布一枚なのに呆れて、一方的に外套を貸したがるタイチには、まったく応答しようとしないう船乗りの青年の目的はなんであろう。青年は、ベーリングとのルート上の連絡航路で働く客船員か。あるいは、北の地からの水産加工物や工業資源を運ぶ貨物船員か。いずれにせよ、北方の自然の略奪と商品化の一端に関わっている人物だ。

青年の挙動は幾分不可解でもある。外との気温差でできる車窓のガラスの氷をナイフで削る行動を繰り返す。氷を削って外を見ている青年の「唇は笑ふやうに又泣くやうに」動き、月に話しかけているようでもある（宮沢 150）。タイチに対して無反応であったにもかかわらず、最後は、熊の襲撃からタイチを救う。

この青年は、揺らいでいるアニミストなのだ。唇の動きが示すアンビバレンスの中には、アニミストの不安が含まれている。自分も非人間との間の交換のバランスを崩す行為に加担しているのではないかという不安である。

このアニミストは今、タイチらナチュラルリストとともに、アニミズム世界を切り裂きながら走る、ナチュラルリズムを体現する最大急行に乗って、北へ北へと侵攻しているのだ。窓ガラスの氷は、化石燃料で温められた内側の〈ナチュラルリズム世界〉と外側の極寒の〈アニミズム世界〉とを隔てる壁だ。氷を削れば、しばらくの間は外のアニミズム世界を視界へと取り戻すことができる。

一方で、この青年が小さく口笛を鳴らして愉快そうにしているのは、二つの世界、外と内を分け隔てるその壁に、そしてナチュラルリズムへと染まっていく自分に喜びも感じているからだ（宮沢 149）。青年は、拡大していくナチュラルリズムに対して不安と同時にほのかな快感をも抱いているのだ。青年は、アニミストの不安と合わせて、二重の惑いの中にいると言える。アニミストとしての不安とナチュラルリズムへの不安という二重の惑いが、船乗り青年の不可解な仕種と行動の全体を説明している。

非人間をモノ化する視点しか持ち合わせていないタイチのようなナチュラルリストによる、非人間への過剰な殺生を止めるために来襲した熊たちに向かって青年は言う。

おい、熊<sup>くま</sup>ども。きさまらのしたことは尤<sup>もつと</sup>もだ。けれどもなおれたちだつて仕方ない。生きてゐるにはきものも着なけあいけないんだ。おまへたちが魚をとるやうなもんだけ。けれどもあんまり無法なことはこれから気を付けるやうに云ふから今度はゆるして呉れ。（宮沢 158）

青年はここで、非人間も人間と同じ〈文化〉を持つという非二元論を確認している。そして、これからはバランスをとるように、「限度の感覚」を忘れぬように人間どもに注意していくことを約束する（ラトゥーシュ『脱成長』8）。青年が、捕虜にした赤ひげの体を労りながら解放すると、この北極狐は「笑つてちよつと船乗りの手を握つて」列車から飛び降りた（宮沢 158）。アニミズムに踏み止まる青年の約束は、すべての〈人〉が「節<sup>ふし</sup>度<sup>ど</sup>ある豊<sup>とよ</sup>かさ」を目指す脱成長の約束なのだ

(ラトゥーシュ『脱成長』72)。

## おわりに

ニュー・アニミズムの論者の一人でもある人類学者のティム・インゴルドは、人類学の入門書の中で、アニミズムについて次のように述べている。

アニミズムはかつて、モノの霊性への間違っただけの信仰の上に築かれた最も原始的な宗教として打ち捨てられたのだか、今日では、実在の完全性の理解において、科学を凌駕する、生の詩学であるとみなされている。それは、他者を真剣に受け取ることから帰結する。(インゴルド 30)

インゴルドも科学的近代を批判的に捉え、人類学的知の領域から、世界を持続可能なものにしていくという課題に取り組んでいる。

人類学の研究方法の中心には、自分たちの研究対象とする人々の中に入り込み、その人たちの声を聞き取っていく〈参与観察〉がある。「参与観察は人々とともに学ぶ方法である」とインゴルドは言う(19)。

アニミズム文学批評は、人類学者の参与観察にならば、アニミズム文学テクストに入り込み、テクスト世界内の存在者たちとともに学ぶ研究であるとしたい。ここでの〈参与観察〉は、テクストというフィールドに入り込み、テクスト内のアニミズムを〈真剣に読む〉実践となる。人類学者が先住民のアニミズム実践に参与するように、文学に現れるアニミズムを真剣に読むことは、現在とは異なる存在論、世界を持続可能なものにしようとする生き方へと自分を開いていく挑戦である。上手く開けたとき、つまり、新たな表現の創造に立ち会い、世界の見え方に変化が起きたとき、それは世界が「再魔術化」された瞬間となる。

## 註

- 1 中沢は、「神話的思考」とは、人間と動物が対称的関係にあるという思想であり、あらゆる生物が同等の権利を有するという「地球法」への感覚であるとする(『熊』30-33)。この博愛主義的思考は、前節で検討したアニミズムの中の平等主義に表面的には類似して見える。ただ、「地球法」が遵守される前提に、人間が失ってしまった「優しい心」、他の種を「思いやったこと」などを置いており、ややロマンチズムが漂う。前節での検討から判断する限り、アニミズムとは、非人間への向社会性や利他性のようなものではない(『熊』31、33)。
- 2 ニュー・アニミズムの視点から、宮沢賢治のアニミズムを読み取ろうとする先行例に、人類学者の奥野克巳による次の一連の論考がある。「アニミズムを再起動する——インゴルド、ウィラーズレフ、宮沢賢治と、人間と非人間の『間』」、「宮沢賢治を真剣に受け取る」、「『人間』と『人間以外』を繋ぐアニミズム」。これらの論考で読解されるのは、「なめとこ山の熊」、「鹿踊りのはじまり」、「いちようの実」である。いずれの論考も、アニミズム存在論の、近代批判としての今日的意義を問おうとしているものと読める。
- 3 宮沢賢治作品を植民地主義の歴史的背景の中に置いて読解する試みに、西成彦『新編 森のゲリラ 宮沢賢治』がある。西はタイチについて、「いでたちからして、そもそも植民地主義の原罪を背負ったとしかいいようのない男である」と述べている(112)。帆布の上着だけの青年については、「肉と血に飢えた紳士達とは対照的な『肉食主義者』」だと指摘している(115)。

## 引用文献

- Godbout, Jacques T. «Les conditions sociales de la création en art et en sciences», *Revue du MAUSS*, vol.24, no.2, 2004, Cairn.info, doi: 10.3917/rdm.024.0411.
- Hallowell, A. Irving. “Ojibwa Ontology, Behavior, and World View.” *Readings in Indigenous Religions*. Graham Harvey, editor. 1960. Routledge, 2002, pp.17-49.
- Harvey, Graham. Introduction. *The Handbook of Contemporary Animism*. Graham Harvey, editor. 2013. Routledge, 2015.
- インゴルド, ティム 『人類学とは何か』 亜紀書房, 2020年.
- ウィラースレフ, レーン 『ソウル・ハンターズ——シベリア・ユカギールのアニミズムの人類学』 奥野克巳・近藤祉秋・古川不可知訳, 亜紀書房, 2018年.
- 奥野克巳 「アニミズムを再起動する——インゴルド、ウィラースレフ、宮沢賢治と、人間と非人間の『間』」 『現代思想』 2020年1月号, pp.185-97.
- 「宮沢賢治を真剣に受け取る」 『モノも石も死者も生きている世界の民から人類学者が教わったこと』 亜紀書房, 2020年, pp.99-122.
- 「『人間』と『人間以外』を繋ぐアニミズム」 『Voice』 2021年2月号, pp.114-21.
- 「食品ロスについて知る・学ぶ」 消費者庁, [https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer\\_policy/information/food\\_loss/education/](https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_policy/information/food_loss/education/). 2021年8月30日アクセス.
- 「食品ロスの現状を知る」 aff.2020年10月号, 農林水産省, [https://www.maff.go.jp/j/pr/aff/2010/spe1\\_01.html](https://www.maff.go.jp/j/pr/aff/2010/spe1_01.html). 2021年8月30日アクセス.
- タイラー, エドワード・B 『原始文化』 上, 松村一男監修, 奥山倫明・奥山史亮・長谷千代子・堀雅彦訳, 国書刊行会, 2019年.
- デスコラ, フィリップ 『自然と文化を越えて』 小林徹訳, 水声社, 2020年.
- 中沢新一 『熊から王へ カイエ・ソバージュ II』 講談社, 2002年.
- 『緑の資本論』 集英社, 2002年.
- 西 成彦 『新編 森のゲリラ 宮沢賢治』 平凡社, 2004年.
- 藤原 浩 『宮沢賢治とサハリン——「銀河鉄道」の彼方へ』 東洋書店, 2009年.
- 「“弁当13万食廃棄” 認める『報道特集』 調べてみる」 TBS NEWS, Tokyo Broadcasting System Television, Inc., 2021年8月27日, [http://news.tbs.co.jp/newseye/tbs\\_newseye4346869.htm](http://news.tbs.co.jp/newseye/tbs_newseye4346869.htm). 2021年8月30日アクセス.
- 三木理史 『国境の植民地・樺太』 塙書房, 2006年.
- 宮沢賢治 『氷河鼠の毛皮』 『宮沢賢治全集 8』 筑摩書房, 1986年, pp.147-58.
- ラトゥーシュ, セルジュ 『脱成長』 中野佳裕訳, 白水社, 2020年.
- , ディディエ・アルバジェス 『脱成長（ダウンシフト）のとき——人間らしい時間をとりもどすために』 佐藤直樹・佐藤薫訳, 未来社, 2014年.